



虹のかけ橋



第49号/令和7年9月



兵庫県立但馬やまびこの郷 <https://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

やまびこの郷は30年目に入りました

兵庫県立但馬やまびこの郷 所長 齊藤 誠一

やまびこの郷が誕生した頃

但馬やまびこの郷は、1996年9月1日に設置され、10月14日に受け入れを始めました。今年9月1日には29歳となり、30年目を迎えることとなります。1996年は阪神淡路大震災の翌年にあたり、まだ被災地では復旧・復興は始まったばかりでした。また、この年度の全国の不登校児童生徒数は、小学生が約1万7千人(0.24%)に、中学生が約7万5千人(1.65%)に達しましたが、まだ制度として適応指導教室や別室もなく、学校へ行けないお子さんたちは家にいるしかなかった時代でした。その当時は、こうしたお子さんたちは「登校拒否児童・生徒」と呼ばれ、誤って理解されることも少なくありませんでした。

やまびこの郷が大切にしてきたこと

このような時代背景の中で当所はスタートし、不登校のお子さんたちが家庭や学校以外に過ごせる場所を提供し、支援してきました。そして、今も変わらず、大切にしてきたことは次の3つです。

まずは混乱した気持ちや心を落ち着かせて、だれからも傷つけられることのない場所にする。2つめは家でも学校でもないけれど、自分がいてもいい場所にする。3つめはしばらく忘れていた笑顔を取り戻せる場所にする。右の<君の幸せを願う人>からの手紙は、まさにこの3つの場所だからこそ書けたのではないかと思います。心理学の言葉を使えば、やまびこの郷は、心理的な安全基地と避難所であり、傷ついた心を癒す回復の場と言えると思います。

卒業生から後輩へ宛てたメッセージ

《今、これを読んでいる君へ》

ここに来るまでに たくさんの事に悩んで、
多くの壁にぶつかったんだろう。

朝、起きられない？ 人と関わるのが苦手？

オレには想像もできないようなものを抱えて

ここにたどりついたんだと思う。

ここに来て、いろんな不安に直面すると思う。

でも、大丈夫。

ここには、できないことを強要する人も

やりたくないことを無理にやらせる人もいないから。

朝、起きられなくても

人とうまく話せなくても

活動に参加できなくてもいい。

自分のペースで、

自分ができると思ったタイミングで

やっていけがいい。

それで最終日に今までのことをふり返ってみて。

きっとその時、

君は成長しているはずだから。

<君の幸せを願う人より>

発達特性のある不登校児童生徒の理解と支援

兵庫教育大学 教授 井澤 信三

1 「発達障害」の捉え方、環境設定とかわり方

発達障害は、日本では、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、自閉スペクトラム症(ASD)が主な障害となります。発達障害とは診断に至るレベルにあるということですが、近年では、発達特性の程度の差(濃淡)として、すなわちスペクトラム(連続体)として捉えるようになっていきます。誰にも発達上の強み・弱み(凸凹)はあります。また、その内容とその程度によっては、社会生活上のつまづきの大きさも異なってくると考えられます。



現在の学校のクラスの状況を考えると、発達障害の診断がある、もしくはそのような傾向がある児童生徒は必ずいるといっても過言ではありません。クラスの児童生徒全員を対象としたユニバーサルなわかりやすい環境づくりとかかわり方が重視されています。それは、生徒指導提要(2022)における発達支持的生徒指導と、意味としては同様になります。それを土台とした上で、個々の特性に応じた学習面と行動面への個別的な対応が求められます。

2 「発達障害」と不登校

発達障害のある児童生徒は、不登校へのリスクも高いと考えられます。発達障害の特性自体が日常生活を妨げている状態が一次障害です。強い特性を持った個人が集団の中に入り、共に過ごすことで生じてくる行動面や情緒面での問題は二次障害と呼びます。不登校は、学校教育の場で生じる二次的な課題の現れの一つです。その他にも、たとえば、被虐待、いじめ被害、ひきこもり、うつ状態、不安状態などが挙げられます。

基本的には、発達障害だから不登校になるわけではないのですが、発達特性も含めて、一次障害への適切な対応、指導・支援を行うことが予防的にもなります。

3 発達特性のある児童生徒の不登校の理解と支援のポイント

発達障害、または発達特性の強い児童生徒における不登校の理解と支援のポイントを以下にまとめてみます。

- (1) 早期の気づき: 言語表出、絵の描写などによる活動的表出、頭痛、アトピーの悪化、チック等の身体的症状の状態
- (2) 早期の対応: 学校内(別室・保健室・部分的にクラス等)に居場所をつくる、原則、できるだけ登校できる方針での対応
- (3) 学校へのアクセスの確保
 - アクセスの場所と時間の候補
場 所: 保健室、別室、部分的に教室への参加 等
時間帯: 遅刻・早退、放課後の参加 等
 - 不登校のもとになる嫌な原因を除去・軽減
先生・友達からの関わり方の変更 → 例えば、いきなり触られることへの配慮 等
 - 登校できるように維持するための工夫
登校した後に、同じ失敗(嫌さ)を経験しないような対応・支援・指導の必要性
 - 学期・学年・学校の変わり目が再登校へのチャンス
「心機一転」ができるケースの存在



(4) 学校外のリソースへのアクセスの確保

教育支援センター(適応指導教室)、教育センター、フリースクールへのアクセス機会 等
土日、放課後の社会とのつながりの確保(例:サークル、塾・習い事、趣味・友人と遊ぶ 等)

(5) 家庭場面での活動の豊富化

生活リズム、お手伝い・学習、家族とのコミュニケーションの豊富化 等

以上のことを踏まえて、本人の意向を最優先した上で、保護者の希望も考慮し、こちらの提案(担任・SC等のこれまでの関わりのある人)から選択・決定してもらうようなやりとりができるとういと思います。

4 行動上の問題についての解決に向けたやりとり

不登校に直結するわけではありませんが、学校生活等で起きるトラブルについて、本人も周囲も不快感をため込むことは、お互いにストレスフルな状況を作ってしまう可能性があります。できればそのストレス状況を軽減できるように、双方に働きかけていくことが求められます。

特にASD的な特性を有する場合、「問題であることに気がついていない」「問題であることに気がついていても認めない」「問題に対する解決案に納得しない」「解決案を了解しても、実行が難しい」などのつまずきが生じてしまうことがあります。その背景としては、自分のルールの柔軟性のなさ・固執性、自己感情理解、他者感情理解、状況理解の困難さがあると考えられます。

発達特性の内容・程度にかかわらず、児童生徒本人の思い・考えや希望を受け止めることは大切です。それが信頼関係につながると考えます。発達障害があれば、それはさらに重要さが増すと考えます。

その上で、問題の理解や次からどうしていくかについて話し合うわけですが、その際に、特性に応じたことばのやりとり(コミュニケーション)における工夫が求められます。

- 今日の話の見通し、時間の枠組みを事前に視覚的に提示すること、あなたが今日、話したいことを2～3つ、挙げてみてください。それぞれ何分ずつにしますか、と事前に予定を立ててもらうこと
- 話したことはお互いが共有できるように書きながら「見える化」していくこと
- 抽象的な事柄ではなく、具体的な出来事(エピソード)をもとに話し合いをすること
- 話がずれてきたときには、その書いたもの(お互いの発言)を示しながら、「この話に戻しましょう」と促すこと
- 同じ話が繰り返されるときには、その書いたもの(お互いの発言)を示しながら、「この話は先ほども聞いたので、こちらの話題にいきましょう」と促すこと
- 感情の高まりにはこちらは動揺せず肯定も否定もせず冷静沈着な対応をしていくこと、感情の高まりが激しい場合には、いったんクールダウン(カームダウン)し、落ち着いてから、先ほどの混乱(パニック)を振り返ってみること

やりとりを通して、①本人がトラブルの内容を理解すること、②解決案に納得できるように、本人が価値をおいていること(例:好きなこと、趣味、夢・やりがい等)に関係づけながら、伝えていくことや、③今後どうするかはいくつかの選択肢から本人に選んでもらうこと、の3点が大切です。この3点を踏まえて、解決に向けたやりとりができるとういと考えます。

◆◆著者紹介(井澤 信三/いさわ しんぞう)◆◆

兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻・教授。博士(教育学)。臨床心理士・特別支援教育士SV。専門は、知的障害・発達障害に関する心理学、応用行動分析学。兵庫県心の教育推進センター主任研究員を兼務。著書「発達障害のある人の問題となる行動を解決するための理論と実践～応用行動分析学をベースとした相談支援の実践～(あいり出版)」など。

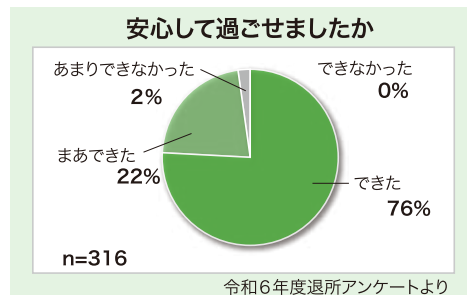
子どもたちの「今」と「未来」を支えるために ～子どもたちの声が教えてくれること～

巻頭で所長が紹介した「やまびこの郷が大切にしてきたこと」は、子どもたちの声からも感じ取ることができます。ここでは、実際にやまびこの郷を利用した子どもたちのアンケートや言葉をもとに、スタッフが日々の関わりの中で大切にしていることを紹介します。

♡ 心の安全を大切に… ♡

「なぜ不登校になったのかと、自分を責めることが多くありました」「自分の人生は終わりだと思っていた」など、苦しい気持ちを抱えながらやまびこの郷にやってきた子どもたちの多くが、利用後のアンケートでは、「安心して過ごせた」と答えています。

子どもたちは、自分を否定されることなく、誰かと比べられることのない安心できる環境の中で、自分の気持ちを受け止めてもらえることで、少しずつ心が落ち着き、安心して過ごせるようになります。



♡ 「ここにいてもいい」居場所であることを大切に… ♡

やまびこは、自分にとっては1つの逃げ場所でした。

やまびこの活動にほとんど参加できなくても、どんな私でもちゃんと真剣に向き合ってくれて絶対に否定されなかった。

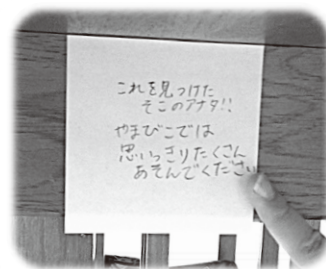
大人の期待を押しつけたり、「みんなと同じようにする」ことをゴールにしたりせず、子どもの心の準備が整うのを待ち、その子に合った活動の仕方や過ごし方を一緒に考えます。

どんな状態の自分でも受け入れてもらえる——その経験は、子どもたちにとって「ここにいてもいい」と思える居場所につながります。

♡ 「楽しんでいい」を大切に… ♡

子どもたちが、「好きなことやしたいことを楽しんでもいいんだ」と思える環境を整えるため、スタッフも子どもたちと一緒に全力で楽しみます。「楽しんでいい」と実感できることは、子どもたちの心をほぐし、笑顔を取り戻すきっかけになります。

製作のへやの机の下に残されたメッセージ



～やまびこで、何かが変わっていく～

ある卒業生は、後輩へ送ったメッセージの中で「やまびこでは、何かが変わっていきます」と語っています。子どもたちは心に元気を取り戻すと、「誰かとつながりたい」「やってみよう」という気持ちが湧いてくるようです。子どもたちの心が元気になることは、社会的自立への第一歩ではないでしょうか。但馬やまびこの郷は、これからも「心の安全」「居場所」「楽しんでいい」を大切に、子どもたちの声に耳を傾けながら、教職員の皆さまや関係機関の皆さまとともに、子どもたちの今と未来を支えていきたいと考えています。